

# 史跡 生目古墳群

—保存整備事業 発掘調査概要報告書V—



2004

宮崎市教育委員会

## 序

宮崎市では15年度から市内の小中学校において「二学期制」を試行しております。二学期制の導入によって、生徒にとって学校生活が余裕のあるものとなるように、そしてその余裕の中で郷土や国際社会への理解や関心を深めてもらえるよう、願ってやみません。そして地元と学校が一体となって生目古墳群への理解を深め、文化財保護の意識を持ち、地元の誇りとしていつまでも大切に守っていって頂きたいと思います。

本報告書が古墳研究の一助となり、活用されますことを願っております。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成16年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

## 例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴う平成14年度発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成14年9月26日～平成15年3月26日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会  
文化振興課　課長 小掠聖  
文化財係　係長 永井淳生（14年度）  
　　〃　田村泰彦（15年度）  
調査事務　主任主事 富永智美  
調査員　主任技師 稲岡洋道  
　　〃　技師補 竹中克繁（15年度）  
　　〃　嘱託 河野賢太郎  
　　〃　門田奈津子  
補助員　　〃　佐藤小夜子  
　　〃　永友加奈子  
　　〃　長友みる子  
　　〃　学生 井上誠二（別府大学大学院生）

5. 本書の執筆は稻岡・門田が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は稻岡・竹中・門田・佐藤・永友・長友・井上が分担して行った。
7. 現場及び遺物写真撮影は稻岡・河野・門田が分担して行った。空中撮影は、有限会社スカイサーべイ九州に委託した。
8. 本書の編集は稻岡が行った。

## 本　文　目　次

第Ⅰ章 生目古墳群の概要.....	1	第Ⅳ章 14号墳・15号墳の調査.....	18
1. 調査に至る経緯.....	1	1. 古墳の概要.....	18
2. 古墳群の立地と現状.....	1	2. 平成14年度の調査概要.....	18
第Ⅱ章 5号墳の調査.....	6	第Ⅴ章 21号墳の調査.....	21
1. これまでの調査の状況.....	6	1. 古墳の概要.....	21
2. 平成14年度の調査概要.....	7	2. 平成14年度の調査概要.....	21
第Ⅲ章 7号墳の調査.....	13		
1. これまでの調査の状況.....	13		
2. 平成14年度の調査概要.....	13		

# 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

## 1. 調査に至る経緯

- 昭和18年 前方後円墳7基、円墳36基の計43基が国指定史跡を受ける。（9月8日）
- 昭和36～38年 上ノ迫土地改良事業により、一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化。
- 昭和37年 古墳標石、道標石、説明版の設置等の整備が行われる。
- 昭和50、51年 『生目古墳群保存管理計画策定書』、航空測量による地形図作成を行う。
- 昭和57年 古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施。
- 平成5年 「宮崎市制70周年記念事業」の一環として（仮称）宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられる。
- 平成5～7年度 国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施。
- 平成8年7月 生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催。
- 平成9年度 『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』作成。土地公有化開始。
- 平成10年度 国庫補助を受けて史跡整備に伴う発掘調査開始。

## 2. 古墳群の立地と現状

生目古墳群は大淀川下流右岸、宮崎市跡江地区に位置する東西約1.2km、南北約1.2kmの長靴の形を呈した丘陵上に立地している。丘陵上は東側からは宮崎市街地が一望できる。丘陵の北西側は最高点44.4mを測る急峻で複雑な地形を呈している。古墳群の大半が立地する南東側は標高25～30mの比較的平坦な地形を呈している。丘陵全城は照葉樹林地で、混ざってスギが植林される。事業開始前の古墳群内は畑地、ココスヤシの苗圃として利用されていた。

古墳群は現在跡江丘陵上に前方後円墳7基、円墳20基、丘陵下に2基の計29基の高塚古墳が所在する他、発掘調査等で確認された円墳7基、横穴墓9基、地下式横穴墓14基により構成される。丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1・2・旧2～4号墳、地下式横穴墓の6基は、跡江丘陵北側に谷を挟んで対峙する独立丘陵に立地する。また横穴墓は、1号墳前方部南側側面に5基、3号墳後円部西側の崖裾に4基構築されている。また、現古墳番号は1～23号(20号は欠番)までの22基の古墳にのみ付してあり、指定時の番号とは異なる。

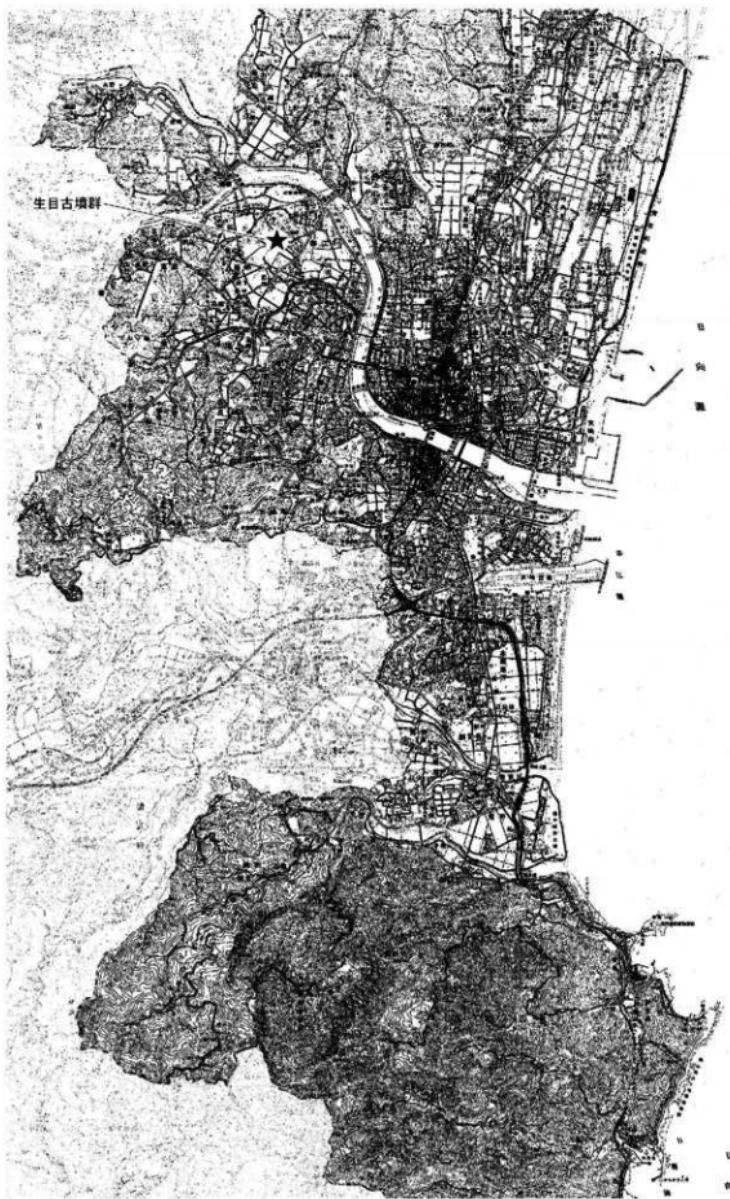
古墳群の史跡指定以前の資料としては、昭和16年に原田仁により100m級の前方後円墳である1・3・22号墳の実測図が作成されている。また地元には戦前に作成された古墳案内略図(徳地一作図)が存在し、この絵図には台地上に前方後円墳8基、円墳30基が記されている。

昭和49年には、前年に破壊された3号墳後円部西側の4基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、貝釧、耳環、馬具類(轡、貝製雲珠)、鐵鎌、刀子等が出土した。

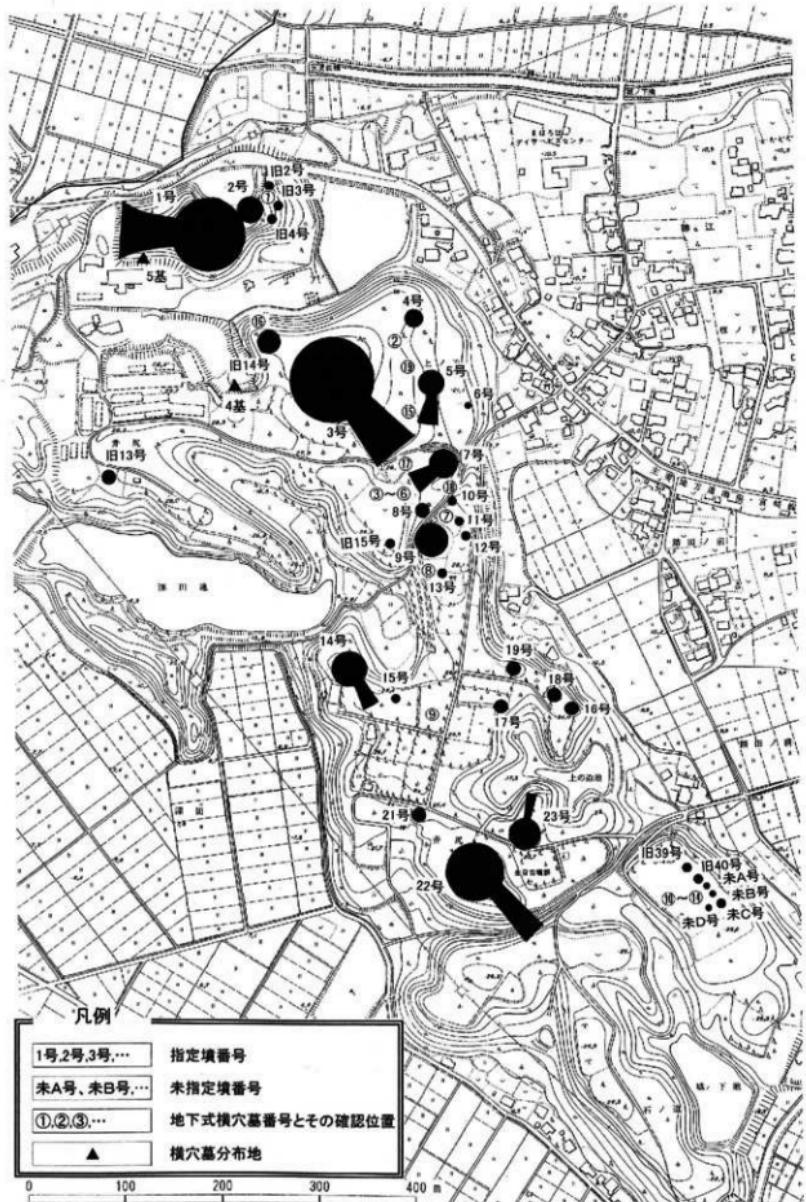
昭和58年には丘陵下の城平地区に所在する41号墳の確認調査を実施。調査の結果、径5m、高さ1.5mの円墳の周囲に幅50cmの周溝が巡ることが確認された。

平成5～7年の生目古墳群周辺遺跡発掘調査では前方後円墳である5・14・22号墳周囲の調査で、転落した葺石が検出され、22号墳からは壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧2～4号墳、旧15号墳周囲の調査を行い、その位置を確認した。その他、地下式横穴墓が8基、土坑墓が6基検出されている。この他、13号墳南側、17号墳西側から円形周溝墓が検出され、丘陵東南部の畑地では環濠集落の存在が確認された。

平成8年には宮崎大学考古学研究室により3・5・7・14・22・23号墳の前方後円墳6基とその周辺の円墳の墳丘測量図が作成された。



第1図 生目古墳群位置図



第2図 古墳群配置図(1/5,000)

表1 高塚古墳内容一覧

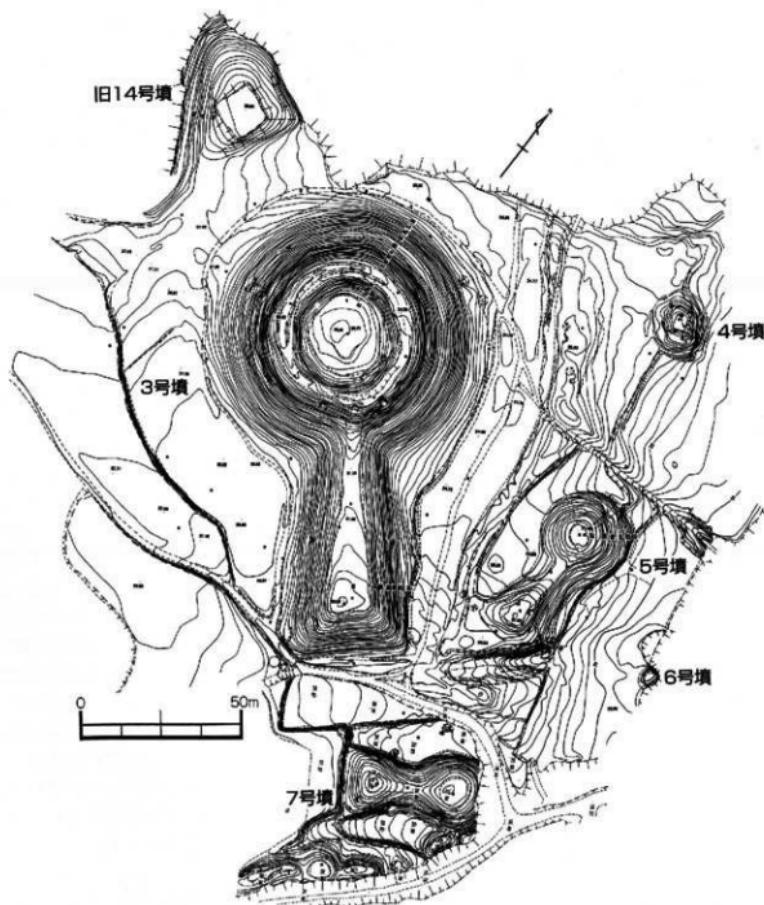
現 現 No	旧 No	墳形	規模(m) 長×円径×高	規格	墓石	出土遺物	備考
1	6	前方後円	136×86×17		有		
2	5	円	27				
3	17	前方後円	143×88×12.7	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世?の墓研堀の溝が巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前方後円	54×29×4.4	後円部2段、前方部2段	有	円筒埴輪?、壺形土器、高环	
6	20	円	8		無		
7	21	前方後円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造り出し有	有	土師器(甕、壺、高环)、須恵器(环、高环、翫、把手付鉢、大甕、脚台付壺、筒型器台)、石製垂玉、石製小玉、石製紡錘軸	埴輪無。出土遺物はすべて周溝内より
8	22	円		2段	無		
9	25	円	34				
10		円	11				
11	23	円	10				
12	24	円	12				
13	26	円	11				
14	27	前方後円	63×38×4	後円部?、前方部2段	有	壺形埴輪	
15		円	11		無		
16	30	円	16				
17	32	円	14				
18	29	円	17				
19	28	円	15				
21	35	円	19		無		
22	34	前方後円	117×60×9.2		有	壺形埴輪	
23		前方後円	57×30×4.9		有		
2		円	10				
3		円	11				
4		円	14				
13		円	19				
14		円	20		無		
15		円					
39		円	16		無		
40		円	14		無	壺形土器	
41		円			無		
42		円	5		無		
未A		円	10.8		無		11号地下式を埋葬主体
未B		円	9.5		無		12-13号地下式を埋葬主体
未C		円	17		無		
未D		円	10.5		無		14号地下式を埋葬主体

表2 地下式横穴墓内容一覧

No	全長	玄室				時期	出土遺物	構築位置	調査内容
		奥行	幅	高	面積				
1	—	—	—	—	—	—	—	2号墳周辺	堅坑確認
2	1.3	0.4	1.5	0.3	0.6			3号墳外堀	完掘
3	—	—	—	—	—			7号墳周辺	堅坑確認
4	—	—	—	—	—			7号墳周辺	堅坑確認
5	—	—	—	—	—			7号墳周辺	堅坑確認
6	—	—	—	—	—			7号墳周辺	堅坑確認
7	1.1	0.6	2	0.45	1.2			9号墳周辺	完掘
8	1.6	0.9	1.8	0.45	1.6	5c中葉	鐵鏟、ヤリガンナ	—	9号墳周辺
9	—	—	—	—	—			15号墳南東約50m	堅坑確認
10	1.8	0.8	2.1	0.5	1.7			未指定A号墳周辺	完掘
11	1.3	0.4	1.75	0.4	0.7	6c後葉?		未指定A号墳周溝内	完掘
12	1.9	0.9	2.1	0.85	1.9			未指定B号墳周溝内	完掘
13	2.5	1.2	1.95	0.7	2.3	6c中葉?	鐵鏟	未指定D号墳周溝内	完掘
14	1.4	0.4	1.72	0.45	0.7	6c後葉?		未指定D号墳周溝内	完掘
15	1.9	0.8	2.3	0.7	1.8			3号墳周溝内	完掘
16	—	—	—	—	—			旧14号周溝内	半蔵
17	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	半蔵(調査中)
18	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	半蔵(調査中)
19	1.95	0.7	1.95	0.6	1.4	5c前葉	鐵鏟	5号墳周溝外側	完掘

平成9・10年には石ノ迫第2遺跡の調査が行われ、この調査は平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。弥生時代中期と後期後葉の集落が確認され、竪穴住居35軒等が検出され、集落廃絶後には土坑墓43基が構築される。所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した他、新たに中期から後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出されている。

平成10年からは整備に伴う発掘調査を開始。3~8、14、15、21号墳、旧14号墳の各所に調査区を設定し、墳丘形態の確認が行われた他、新たに地下式横穴墓が数基確認され、14年度調査終了段階で合計19基になった。



第3図 3号墳周辺図(1/1,500)

## 第Ⅱ章 5号墳の調査

### 1. これまでの調査の状況

3号墳前方部東側、丘陵東側縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳の東側は開墾により削平され、特に前方部隅角は著しい。墳丘の北側から西側にかけては、幅8m程度の周溝が巡り、その外側には西側のみ周堤状の隆起が確認できる。

#### 【調査箇所】

後円部北東側約1/4(5Ia、5Ib)

後円部南西側1/4から周堤(5IIIa)

くびれ部東側(5C)

前方部東側側面(5IIa、5IIb)

前方部前面東側(5IIc)

前方部西側側面(5IVa)

前方部前面西側から周堤(5IVb)

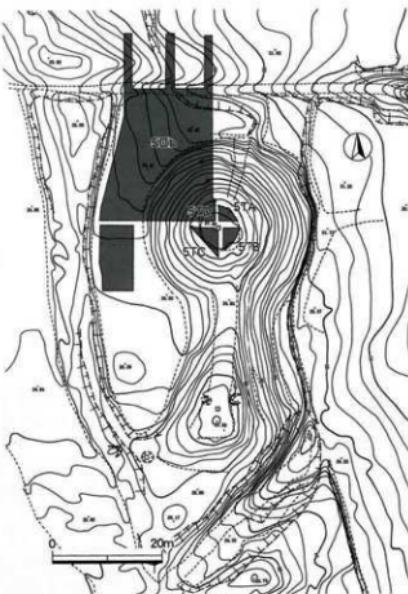
#### 【調査の結果】

墳丘は前方部、後円部共に2段築成で、下段以下に基壙を設ける。後円部のテラスは標高24.5m付近で巡ると考えられるが、残存が悪い。墳丘斜面には葺石が葺かれ、上段部分では比較的の残存しており、5IIIでは上段端部に直径20~30cmの円礫を横位に配する根石列がみられ、斜面に対し、縦方向に区角列石も3箇所ほどで確認できる。下段でも葺石が確認できるが、後世の溝状遺構(幅1.1~2.3m)、土坑、擾乱により大きく削平され、明確な墳端も確認できない。

前方部東側は前方部前面付近で南北方向に走り、墳丘下段と基壙を大きく削り、その後墳丘の形状に沿うような状態で伸びる溝状遺構が確認され、上段裾付近からテラス部分のほとんどと下段斜面を大きく削っている。葺石は墳頂部から隅角に至る部分を除き残存しており、斜面には上段、下段ともに丁寧に葺かれ、それぞれの端部では直径20~30cmの円礫を横位に配した根石列が一部で認められた。斜面の傾斜角は隅角側からくびれ部にいくに従い緩やかになる。基壙はくびれ部付近で明確に確認でき、盛土整形で基底部幅2.0m、下段裾から0.8m幅でテラス状になる。また墳丘端は南側を走る農道によって大きく削平されている。

前方部西側では上下段テラスは前面の一部で確認されたのみで、墳丘斜面は葺石が確認されたが、墳頂部から隅角に至る部分では残存していない。前方部西側側面では上段の葺石は比較的の残存が良く、端部に根石と思われる直径20cm程の円礫を横位に配した石列が認められたが、その石列が隅角側から後円部側に向かって下る状況が見られた。下段は墳端部分を幅0.6m、深さ25cmを測る溝状遺構によって削平されているため、墳端を認めることが出来なかったが、上段と同様の状況になると考えられる。前方部西側側面の墳端では基壙は確認できない。

前方部前面の葺石は東側に比べ西側は残存が悪い。基壙は西側隅角にいくに従い、隆起が少なくなり、5号墳西側に控える周堤に接して隅角は認められると推測される。



第4図 平成14年度調査区位置図(1/900)

周溝は墳丘西側で確認でき、隅角付近から前方部側面に平行に構築されるが、途中から外側に開く。底面は隅角側から後円部に向かって下っており、途中数箇所で傾斜変換が見られる。最大幅12.0mを測る。前方部前面で周溝は確認されていない。

出土遺物は墳丘主軸を挟んで東側と西側ではその出土分布が異なっている。墳丘西側ではくびれ部付近の周溝内から壺形土器が2点(平成10年度調査分)出土している程度で、それ以外は小片である。個体の確認できるものの多くは東側で出土しており、このことから埴輪の樹立は東側のみであったと考えられ、丘陵東側に対する意識が窺える。また、これらの出土位置は墳丘上段斜面から上段裾で集中が見られるため、樹立は墳頂平坦面のみと考えられるが、埴輪樹立痕は確認されていない。埴輪のほとんどは前方部上段斜面に出土しているが、くびれ部付近の前方部平坦面からは0.8mの間隔で3個体の埴輪の底部が出土しており、ほぼ原位置を留めていると考えられるが、樹立のための掘方は確認されていない。これらの埴輪は特徴的な形態を呈しており、前方後円墳集成編年5期に相当するものと考えられる。

5号墳西側の周堤(3号墳周堤)からは、5世紀後葉以降の構築が考えられる地下式横穴墓(15号)が検出された。周堤の隆起を利用して構築され、3号墳周溝側に羨道があり、5号墳に向けて玄室を持ち、豊坑が見られない。玄室は周堤に平行する長方形プランに近い平入りを採用し、遺物は長頸瓶が出土している。

## 2. 平成14年度の調査概要

本年度は2箇所で調査区を設定した。

### 5 III b

墳丘は後円部北西部1/4を、周溝は5 III a 残り部分、及び墳丘北西側周囲全体を調査した。並びに、墳丘北側で東西方向に伸びる道路状遺構の確認のために4本のトレンチを北側に伸ばした。調査の結果、墳丘上下段を確認した。しかし、下段は中位以下は墳丘に沿って大きく削平を受けており、原地形を留めていない。葺石は丁寧に葺かれた状況が見られるが、やはり下段部分で削平されており、残存が悪い。墳丘上段部分は比較的良好に残存しており、上段端部には直径15~25cmの円礫を横位に配した根石列が確認でき、縦方向にも2箇所ほどで区画列石が確認できる。また、下段以下に設けられていたと考えられる基壇についても墳端を除いて削平されており、確認できなかった。標高25m付近で上下段間のテラスが巡っていたと考えられるが、明確には捉えられなかった。周溝は後円部に添う形で確認できた。幅2.3~4.5mで深さ20~50cmを測り、後円部背面に向かって下る。周溝西側では70cm程の明確な立上がりが見られる。周溝外側では、調査の結果では平坦な状態で検出されたが、自然堆積土壌は見られず、後世に整地されている可能性が高い。ただし、その平坦面からは地下式横穴墓(19号)が確認された。詳細については後述する。遺物は墳丘上段斜面から埴輪の小破片、周溝内からは高杯の破片が数個体分出土している。

### 5号墳後円部平坦面(5TA、5TB、5TC、5TD)

後円部平坦面部分を南北、東西方向に土層確認ベルトを残し、4分割して調査した。北東部分を5TA、南東を5TB、南西を5TC、北西を5TDとした。墓壙の平面プランの確認のための調査である。調査の結果、5TAで1~5cm大の円礫が多数確認された。この小円礫群は覆土である表土付近から出土し始め、覆土内で厚さ30cmほど堆積しており、一様に後円部平坦面に敷かれた状況ではなかった。これら的小円礫は他の5TB~5TDにかけては僅かに見られる程度である。また、5TBでは墳丘覆土から掘り込みが見られ、盜掘坑である可能性が高い。この後円部墳頂平坦面については15年度以降も継続して調査を行う予定である。

### 19号地下式横穴墓

後円部周溝外側では地下式横穴墓が確認された。構築位置周囲の平坦な地形は後後に改変を受けしており、原地形を留めていない。地下式横穴墓は竪坑を5号墳後円部側、玄室をその外側に向かつて構築しており、羨門から玄室にかけての殆どの天井が崩落した状態で検出された。竪坑、玄室ともにシラス堆積土まで掘り込みが見られる。竪坑は幅3.5m、奥行き2.0m、現状の深さが120cmを測り、長方形を基調としたプランを呈する。竪坑床面は平坦に近いものの僅かに中心に向かって下っている。また、竪坑東壁、西壁それぞれ25cm中心側でピットが確認された。東側ピットは直径20cm、深さ65cm、西側ピットは直径30cm深さ60cmを測る。竪坑底面から5cm程立ち上がって羨門が設けられており、幅85cm、高さは天井が崩落しているが、推定で約50cmを測る。竪坑内埋土は最上層が黒色土の自然堆積層でそれ以下は不純物が多く混入するシラス土、褐色のローム土、黒色土が塊り状に堆積する。玄室は幅195cm、奥行きが65cmを測り、長方形の平入プランを呈する。天井は玄室両側で僅かに遺存しており、西側隅付近で50cm、東側で30cmを測り、西側が高くなる。床面は両側が中心部より僅かに上がる。また、羨門付近の竪坑内からは純度の高いシラス土の板状の塊が出上した。このシラス塊は羨門西側袖付近の竪坑壁に貼りついた状態のものと羨門正面で厚さ15cmの板状のものが確認された。羨門を板閉塞の支えに使用したものか、もしくはシラス塊そのものを閉塞に使用したと考えられる。遺物は玄室内の中央部からやや西側で鉄鏃が2点重なった状態で出土しており、刃先は中心部を向いている。また、竪坑周囲から竪坑埋土最上層内では土師器の小型の甕、壺、高杯が出土している。埋葬後、意図的に竪坑を埋め込んだのであれば竪坑内すべてを埋めていたと考えられ、竪坑埋土の最上層に自然堆積層は生じないと考えられる。このことを、竪坑内で確認されたピットを加味して想定すると、埋葬後も竪坑は埋められることなく、竪坑開口部分に木蓋をして閉塞し、その木蓋を安定させるための棟木を支えるための柱痕がこのピットであり、木蓋の上には封土(マウンド)を施し、その周囲で祭祀を行ったと考えられる。時間の経過によって木蓋天井が腐食し、陥没してマウンドの土が流れ込んだが満たされることなく、その後、周辺に配置された供献土器が流れ込んだものと想定したい。

#### 出土遺物

1~8は5号墳出土。今回の調査区では墳丘斜面から埴輪片が数点、周溝内から土師器の高杯などが出土している。周溝内の高杯は底面から約10cm浮いた状態で出土している。高杯は良好な杯部資料は見られなかった。脚柱部はいずれも短脚で1・2はエンタシス状を呈する。4~8は埴輪片、4は複合山縁になる。5は体部から口縁部間の屈曲部である。6・7は底部で、とともに焼成前底部穿孔で、端部は内面に向かって充実させ、6はL字状になる。8は体部片で絵画状の線刻がみられ、右手に「シカ」と左手に弓を射る「ヒト」とも考えられるが、多くが欠損しており判別は難しい。

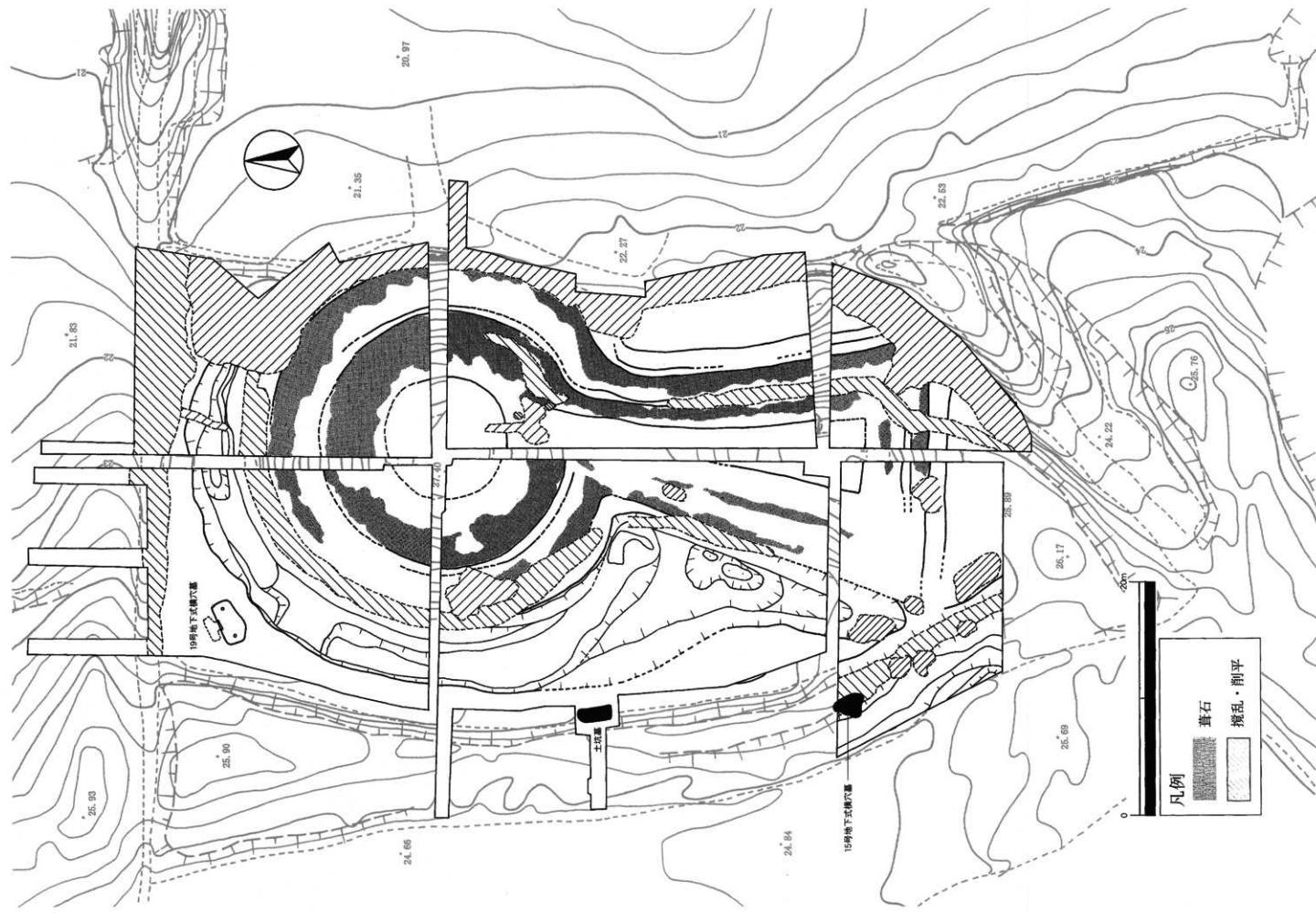
9~15は19号地下式横穴墓出土遺物で、9・10の鉄鏃は玄室内より、11~15は竪坑最上層自然堆積土内及び竪坑周辺から出土している。11は小型の甕で丸底を呈する。12は小型壺で球形の胴部を持ち、底部は平底気味になる。高杯は1・2同様いずれも短脚で、14・15はエンタシス状を呈する。13は杯部で僅かに屈曲部をもって外反する。

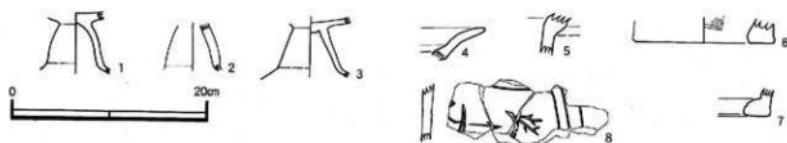
先述したとおり、1~3は19号地下式付近の周溝外縁に近い部分から出土しており、底面からも浮いた状態で出土している。それぞれで出土した高杯についてもプロボーションからは時期差は見られず、19号地下式横穴墓の供献土器からの流れ込みの可能性がある。しかしながら、19号地下式横穴墓出土の土器は今塙屋・松永編年の3期に相当する資料と考えられ(今塙屋・松永2002)、5号墳築造時期(集成編年5期)とさほど時間差は感じられず、5号墳に追従して構築されたと考えられる。

#### 【参考文献】

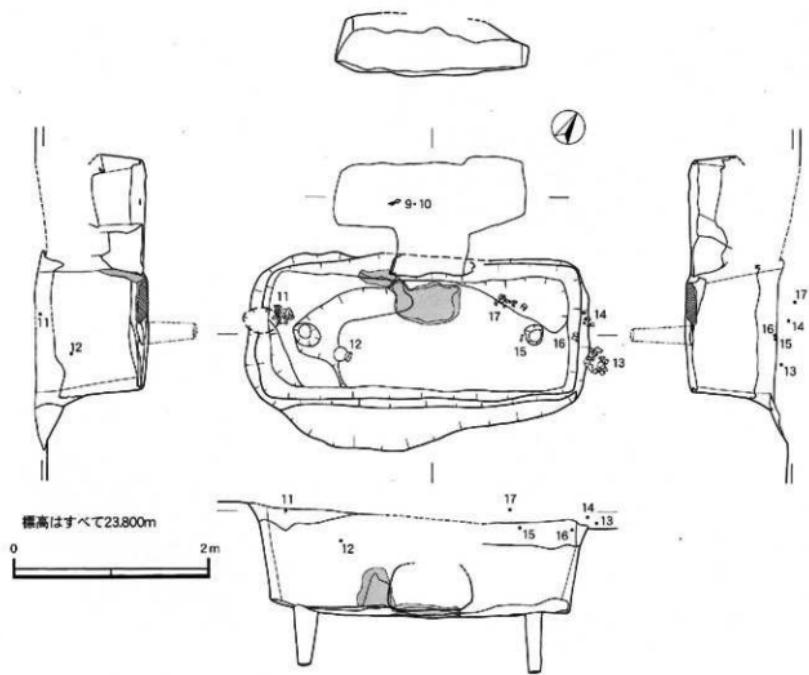
- 発表題旨 今塙屋毅・松永幸寿 2000 「日向における古墳時代中～後期の土解層－宮崎平野を中心にして－」  
『古墳時代中・後期の土解層－その編年と地域性－』 第5回九州前方後円墳研究会

第5図 5号地盤調査区図(1/300)

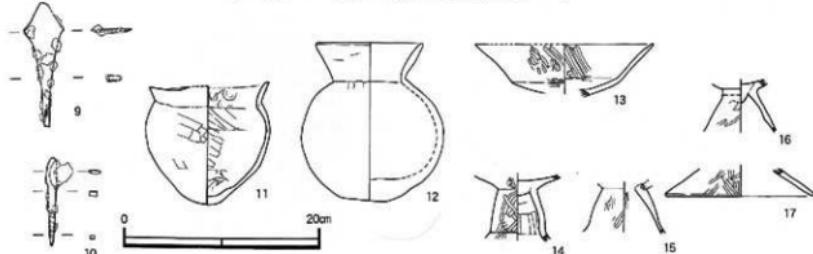




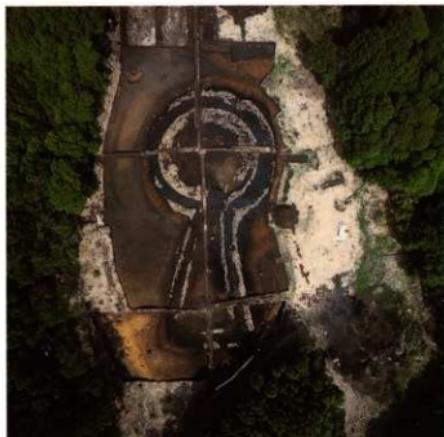
第6図 5号墳出土遺物(1/5)



第7図 19号地下式横穴墓実測図(1/50)



第8図 19号地下式横穴出土遺物(1/5)



図版1 5号墳(上空より)



図版2 後円部北西側(北西より)



図版3 後円部周囲周溝(南より)



図版4 後円部墳頂(南東より)



図版5 後円部墳頂(南東より)



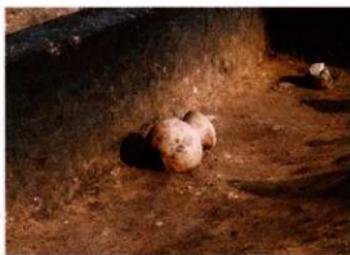
図版6 後円部墳頂(南東より)



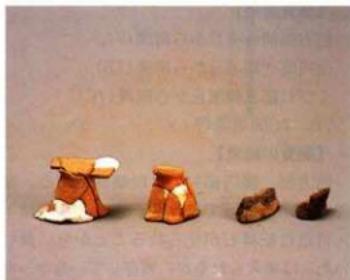
図版7 19号地下式横穴



図版8 19号地下式羨門付近シラス塊



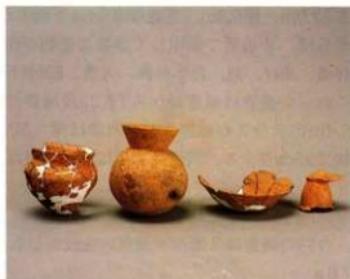
図版9 19号地下式遺物出土状況



図版10 5号墳周溝内出土遺物



図版11 19号地下式玄室内出土遺物



図版12 19号地下式竪坑内出土遺物

### 第III章 7号墳の調査

#### 1. これまでの調査の状況

3号墳前方部南側、台地縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は西から東へ下る傾斜地に立地し、主軸を東西方向に持つ。古墳の後円部北側、東側周溝は、堀割状に造られている道によって大きく削られている。墳丘両側面には、幅3~15m程度の周溝が巡り、現況では前方部前面側は不明となっている。また、後円部南側周溝内には島状の隆起が見られる。調査前は周辺に雑木が繁茂していたが、調査に伴い、墳丘上、周溝内の樹木はすべて伐採した。

##### 【調査箇所】

前方部前面墳丘から周溝(7A)

後円部北側墳丘から周溝(7B)

くびれ部北側墳丘から周溝(7C)

7B、7C間周溝(7I)

##### 【調査の結果】

前方部、後円部共に二段築成である。後円部は25.0m付近でテラスが巡る。葺石はテラス付近に転落石が見られることから、葺いていたとは考えられるが、残存していなかった。

下段は斜面中位以下は削平されており、墳端の検出もできなかった。

前方部はくびれ部付近では25.2mの位置でテラスが巡るが前面では確認できなかった。葺石は上段においてのみ残存するが状態は悪い。下段は後円部と同様に斜面中位以下の削平が著しく、墳端の検出は出来なかった。

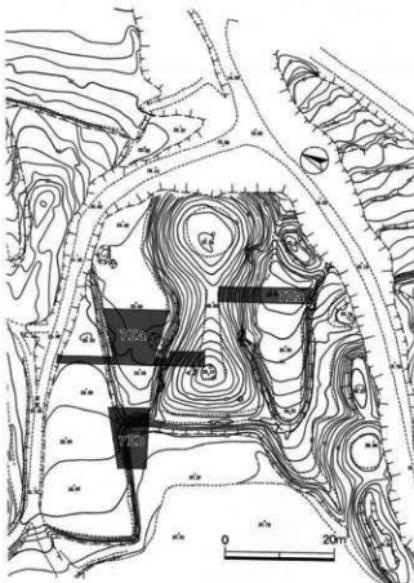
周溝は外側立上り付近が最深部になり、深さは推定墳端から約50cmを測る。外側は高さ1.5mで著しく立上る。また、くびれ部から後円部にかけては造り出しが確認された。地山整形で墳丘端周囲のテラスから派生して平坦面をもつものと考えられ、周溝に大きく突き出して構築されている。長さ12.0m、幅3.3m、基底部高54cmを測るが、平坦面部分は削平されている。造り出し周囲の周溝内からは、2箇所で集中して多数の遺物が出土しており、小型の甕、壺、鉢、高杯、須恵器の坏身、坏蓋、高杯、甕、把手付鉢、大甕、脚台付壺、筒型器台、垂玉、白玉、石製紡錘車が出土している。これらの遺物は須恵器からTK23段階併行期と推測される。前方部前面の周溝では墳端と周溝間に0.4mのテラスが確認され、周溝は深さ52cm、幅6.8mで最深部は中央部付近にあり、周溝外側は現状で95cm立上る。周堤の有無は確認できなかった。

#### 2. 平成14年度の調査概要

今回の調査は3箇所で調査区を設定した。

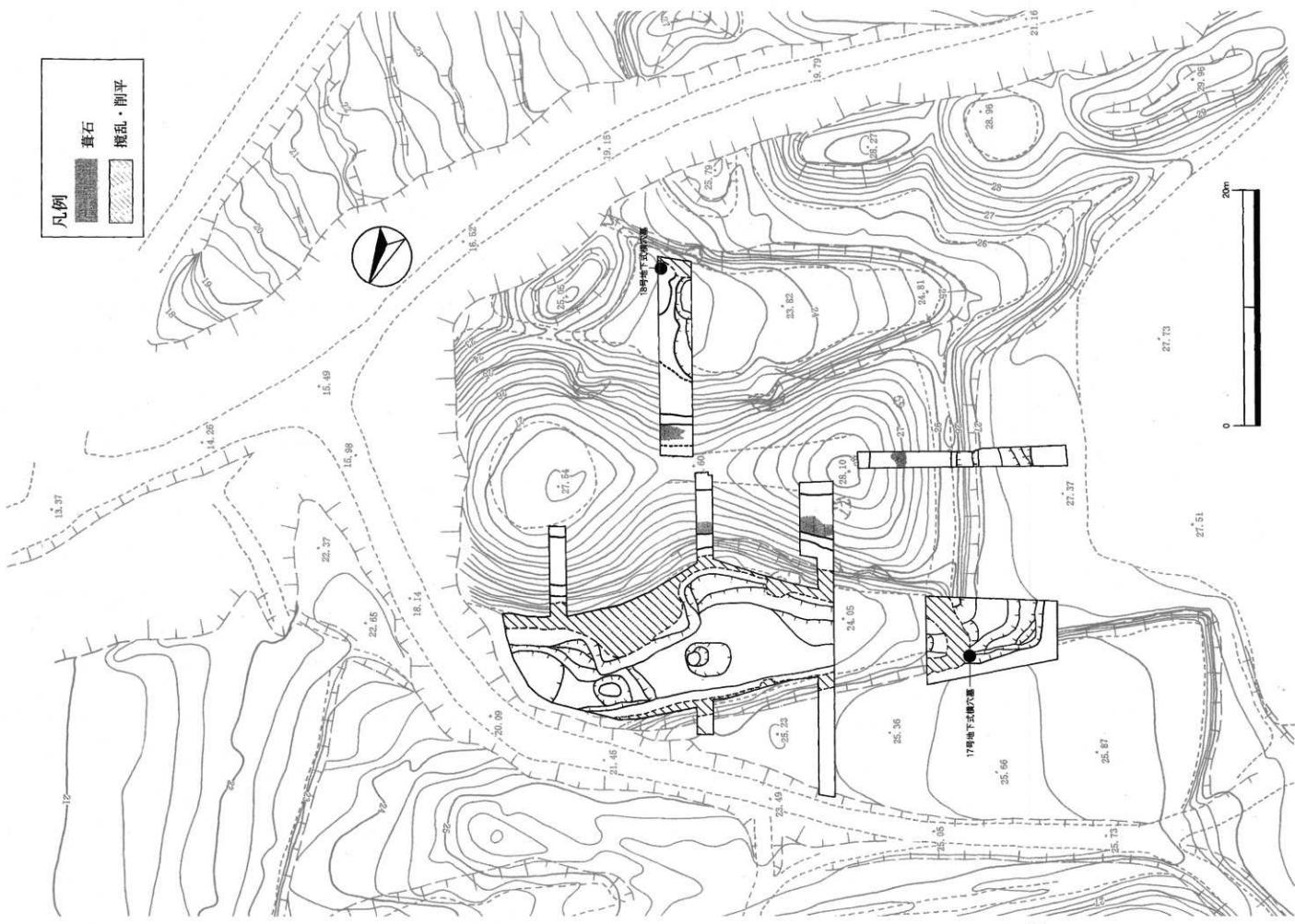
##### 7IIa

前方部北側側面に調査区を設定した。墳丘部分では幅3.0mの調査区を、周溝の外側ではその延長



第9図 平成14年度7号墳調査区位置図(1/900)

第10图 7号勘探区图(1/300)



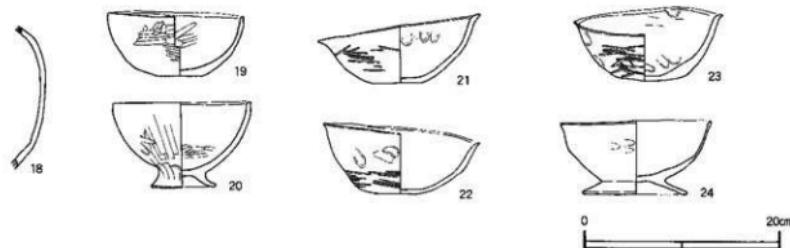
上に、幅1.5mの調査区を設定した。また周溝部分には面的な調査区を設定した。墳丘は2段築成であることが確認され、標高25.9m付近で幅0.5mの下段テラスが確認された。上段斜面では残存状況の良い葺石が見られ、10~25cmの円礫を横位に配した根石列、縦に並ぶ区画列石も認められた。しかし、葺き方に丁寧さは見られない。下段斜面は7B、7Cと同様の結果となり、斜面中位以下は削平され、原型を留めていない。周溝部分では幅0.5mの墳丘周囲のテラスが確認された。周溝は幅5.5~11.0m、深さ60~100cmを測り、前方部から後円部に向かって下る。周溝外側は200cm立上り、周堤の存在は確認できなかった。周溝内には葺石を構成していた転落石が見られたが、前年度までの状況と同じく下段斜面を補うほどのものではなく葺石は上段のみに葺かれていたと考えられる。遺物は周溝内の2箇所で遺物が出土しており、土師器の壺、鉢が出土している。

### 7 IIb

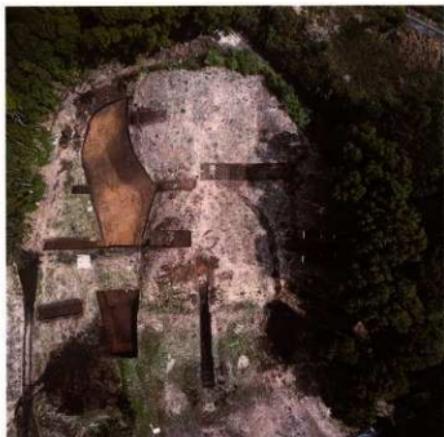
隅角周辺の周溝部分に設定した。隅角及び周溝形態確認のための調査区である。調査の結果、墳丘部分は前方部側面側が著しく削平を受けており、前方部側面及び前面、隅角は明確に検出することはできなかった。周溝は明確に確認されたが、前方部側面と同じく、一部を削平されている。周溝は前方部前面側で幅7.0m、側面側で推定4.0mを測り、明確な墳端が確認されていないものの前面側では推定で深さ0.5cm、側面側では0.7cmを測る。底面は前面側ではほぼ平坦になるが、隅角付近から後円部に向かって大きく下る。周溝外縁は明確に立上り、前面側では50cm、側面側では85cm立上がる。また、側面側周溝外縁からは周溝の立上りの斜面を利用して構築された地下式横穴墓(17号)が確認され、玄室の東側半分を削平されている。今年度は遺構の検出までに留まつたが、現状では、玄室は平入りを採用していると考えられる。明確な竪坑は見られず、僅かなスロープを持って玄室に至ると考えられ、12年度に調査された3号墳南東側の周堤斜面を利用して構築している15号地下式の形態に似る。17号地下式は周溝底面で検出されており、7号墳構築と時間差はそれほど感じられない。また、17号地下式西側の側縁の周溝では状態の良い土師器の鉢が4個(21~24)まとまって出土しており、17号地下式の供獻土器と考えられる。周溝からは他に遺物は出土していない。

### 7 IIIa

後円部南側のくびれ部付近の墳丘から、周溝外縁部分まで設定した。調査の結果、前方部は2段築成であることが確認された。上段斜面のみで葺石が確認でき、やはり下段斜面では見られなかった。上段斜面の葺石は7 IIaで確認された葺石同様、葺き方に丁寧さは見られないものの直径20~40cmの円礫を横位に配する根石列、区画列石が明瞭に見られる。下段斜面は現地形に近い状態で検出されたと考えられるが、墳端付近は削平されている。周溝部分では、周溝外縁から墳丘を繋ぐ陸橋が確認された。南北方向に設けられ、地山整形によって造られている。路面部分となる平坦面は削平を受けており原形を留めていない。現状で延長7.0m、路面幅1.0mを測る。陸橋の東西の基底部は今回の調査では確認できなかった。陸橋部を挟んだ東西の周溝からは土師器の壺片が僅かに出土している。



第11図 7号墳出土遺物(1/5)



図版13 7号墳(上空より)



図版14 墓丘北側周溝(西より)



図版15 前方部北側側面上段(北より)



図版16 7IIb(北東より)



図版17 7IIIa遺物出土状況



図版18 17号地下式横穴墓



図版19 17号墳周辺遺物出土状況



図版20 7IIIa(南より)



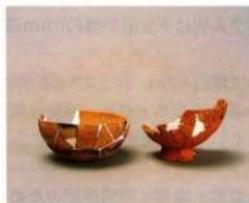
図版21 7IIIa墳丘部部分(南より)



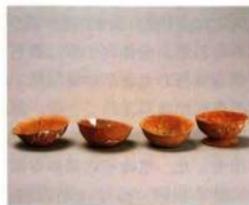
図版22 7IIIa周溝内土橋(南西より)



図版23 18号地下式横穴墓



図版24 7号墳周溝出土遺物



図版25 17号地下式周辺出土遺物

## 第IV章 14号墳・15号墳の調査

### 1. 古墳の概要

古墳群中央部に位置し、墳丘西側及び後円部周囲丘陵斜面が控えており、特に墳丘西側はそのまま沖積地へと続く。周辺の沖積地からは14号墳を望むことができる。15号墳は14号墳東側隅角より南東側約10mの位置にある円墳で現状直径11mを測る。墳丘上には現在カラカシ、マテバシイ、スギなどが見られる。14号墳前方部周囲、15号墳周囲は以前ココスヤシの苗圃として利用されていた。

### 2. 平成14年度の調査概要

#### 14号墳

墳丘主軸上より東側に調査区を設定した。14a・14bは13年度、14c・14d・14fは14年度の調査である。

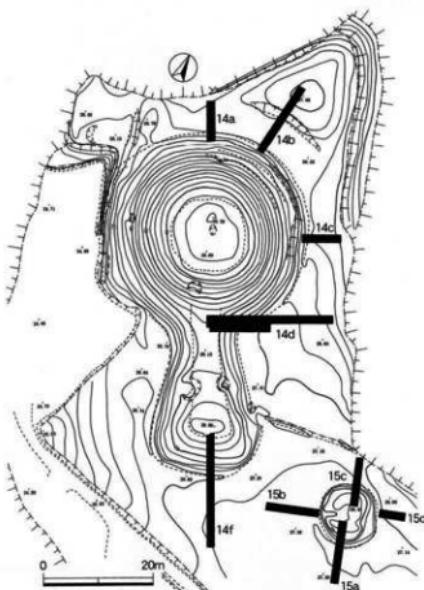
#### 14a・14b・14c

後円部の墳端及び周溝確認のため、北側主軸延長線上に14a、北東側に14b、東側に14cを設定した。3トレンチすべてで、ほぼ同じ状況で墳端及び周溝が確認された。墳丘下段斜面には、残存は悪いが、直径10cm程度の円礫や角礫で葺石が葺かれている。端部では、直径約20cmの円礫で根石列が巡り、そこから傾斜変換して、テラス状に平坦面が幅約0.6m巡る。平坦面には直径約15cm程度の円礫や角礫で敷石が施されている。

周溝は幅約4.2m、深さ20cmを測るが、周溝外縁は14a・14bでは緩やかに立ち上がるものの14cは15cm著しく立ち上がる。遺物は周溝床面から浮いた状態で、14a・14bで土師器碎片が僅かに一点ずつ出土したのみである。

#### 14d

墳丘形態・墳端・周溝確認のため、東側くびれ部に設定した。調査の結果、前方部は二段築成で後円部に接続する。前方部上段は下段と比較して著しく低い。葺石は良好な状態で確認された。上段平坦面、下段テラスにはそれぞれ敷石が施されており、上段平坦面には直径約3cmの小礫が、下段テラスには直径約10cmの礫が敷かれている。上段斜面、下段斜面、墳端には明確な区画列石、根石列がみられる。全体に丁寧に葺石が葺かれているが、くびれ部を境に前方部側と後円部側では葺かれている葺石の大きさが異なり、前方部側では直径約15cm程度の葺石が、後円部側では直径約20cm程度の葺石が使用されている。周溝は、深さ約20cmを測り、外側にごく緩やかに立上がる。遺物は土師器碎片が多数墳丘斜面で出土したほか、前方部上段平坦面で元位置を留めた状態で壺形埴輪が3個体出土した。埴輪基底部から約80cm程度の間隔をおいて、それぞれの底部片に一個ずつ円礫が入った状態で出土した。底部片は樹立の状況は見られなかったが、樹立痕と考えられる直径約25cm、深さ約5cmの掘方が認められ、築造当初は、掘方に押しこんだ後に、円礫を重石にして樹立している。



第12図 14号墳・15号墳調査区位置図(1/900)

たと考えられる。

#### 14 f

墳丘形態・墳端・周溝確認のため、前方部前面主軸延長上に設定した。

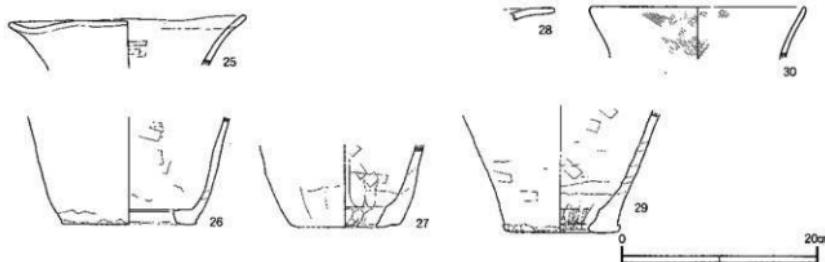
調査の結果、墳丘は二段築成で14dほどではないが、上段が下段と比較して低いことが確認された。上段平坦面、下段テラスには敷石が施されており、上段平坦面では直径約3cm程度の小礫が、下段テラスでは直径約10cm程度の礫が敷かれている。残存は悪いが、葺石は上段斜面、下段斜面共に葺かれしており、直径約20cm程度の区画列石や根石列が見られる。下段斜面は端部の根石列から傾斜変換し平坦面が巡るが、平坦面には14a・14cで見られた敷石は施されておらず、また、ココスヤシの植栽により著しく削平されているものの周溝は確認されず、前方部前面には巡らないと考えられる。遺物は墳丘斜面から土師器碎片が数点出土した。

墳丘以南で削平が著しく一部分の残存であるが、住居を一軒検出した。埋土中から弥生土器片を数点出土した。

#### 出土遺物

14号墳ぐびれ部付近の前方部平坦面からは壺形埴輪が3個体樹立した状態で出土している。出土位置から25と26、29と30が同一個体である。26・27・29は底部で、いづれも焼成前底部穿孔で、端部は充実させて作られている。ただし、肥厚の仕方にはバリエーションを見られ、26は端部が内面向かってL字状に肥厚し、27・29は体部から徐々に肥厚しながら端部に至る。29は端部で僅かにT字状になる。これらの底部整形の状況は生目5号墳出土の埴輪にも見られるが、14号墳の資料のほうが体部に張りが見られ、復元すると壺形埴輪を想起させる。底部整形の状況から5号墳との時期差については、現状でそれほど見出すことができず、前方後円墳集成編年4～5期に相当すると考えられる。14号墳は調査区が狭小ではあるが、現状では壺形埴輪しか見られず、円筒埴輪を供出した5号墳以前の構築であることが窺える。

【参考文献】 宮崎市教育委員会 2003『史跡生目古墳群 一保存整備事業 発掘概要報告書一』宮崎市文化財調査報告書第54集



第13図 14号墳出土遺物(1/5)

#### 15号墳

墳径・墳形確認のため、墳丘および周間に4つのトレンチを設定した。南側に設定した15a、北側に設定した15bは墳頂平坦面から推定周溝構築位置まで、西側の14b、東側の14cは現況墳端から推定周溝構築位置まで設定した。墳丘部分はテラス、墳丘の明確な傾斜変換は見られず、段築の確認はできなかった。葺石は見られない。現況墳端から約45cm間が地山整形、それ以上が盛土によって形成される。墳頂部付近から多数の弥生後期前葉の土器が出土しており、盛土をする際に混入したものと考えられる。墳丘周囲はココスヤシの植栽のために著しく削平されているが、全てのトレンチで周溝を確認した。深さは約35cmを測る。現況墳端よりもかなり外側で周溝が確認され、墳径は18.5mの円墳に復元できる。周溝内からは遺物は確認できなかった。



図版26 14a(北より)



図版27 14c(東より)



図版28 14d(東より)



図版29 14d埴輪出土状況



図版30 14f(南より)



図版31 15a(南より)



図版32 15b(西より)



図版33 14号墳出土埴輪(南東より)

## 第V章 21号墳の調査

### 1. 古墳の概要

21号墳の北西側に位置する円墳である。墳丘北側には市道がL字に走り、曲り角から私道が西方向に延びる。周囲の畠地は以前ココスヤシの苗圃として利用され、土地の改変が著しく、特に墳丘南側、西側は墳丘を残し、高さ2mの急崖となっている。墳丘上には現在、カラカシ、サカキ、マテバシイなどが見られる。

### 2. 平成14年度の調査概要

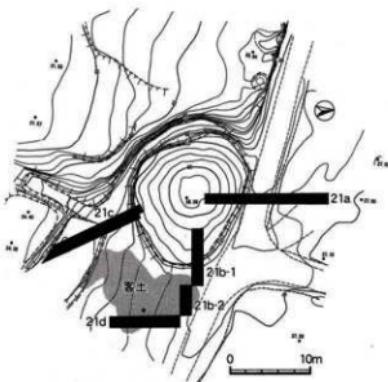
墳丘形態確認、及び周囲施設確認のため、4本のトレーニングを設定した。しかし周辺のココスヤシの植栽のため、全てのトレーニングで著しい搅乱がみられた。当初、調査区は墳丘北側に21a、それに直行する東側に21b、地形改変著しい南側でも、比較的の残存の良い位置に21cを設定した。

21aは現況墳丘の頂部から推定周溝構築位置まで設定した。墳丘は明確な下段テラスは確認できなかったものの、墳丘の傾斜変換の状況から、2段築成である可能性が高い。下段斜面中位以下は私道によって削平されており、墳端は確認できなかった。現墳端から約5.5m外側で周溝が確認された。周溝は現況墳丘に沿う状態で廻っており、幅2.7m、深さ80cmを測るが周溝外縁は170cmと著しい立上りが見られる。遺物は、墳丘盛土から土師器碎片、周溝内から埴輪片、弥生土器の高杯の脚部が出土した。墳丘斜面には葺石は見られず、周溝内にも転落したと考えられる礫はみられなかった。

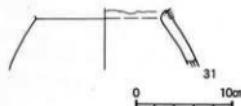
21bは現況墳丘中位から推定周溝構築位置、21cは墳端から推定周溝構築位置まで設定した。両調査区共に著しい削平のため、墳端、周溝は検出されなかった。ただし、21b墳端付近では削平はそれほどなく、従来考えられているように円墳であるならば21aで確認された規模の周溝の継ぎが墳端に沿って検出されるはずであったが、検出されなかった。そのため、前方後円墳、造り出し付円墳などを想定することもできたため、21bに直行する南側の位置に21dを設定した。

21dは、やはり搅乱、削平が著しかったものの、現況墳丘には沿わずに東西方向に走る溝状造構が確認された。この溝状造構は、造構上部の大半が削平されているため、覆土、埋土の状況からの時期推定は困難であった。また、溝状造構の南壁付近では地下式横穴墓(20号)が確認された。地下式は竪坑を溝状造構側、玄室を南側に設ける。遺物は溝状造構内から壺形埴輪片1点と、搅乱土中から土師器片、壺形埴輪片を多数出土した。

今回21dで確認された溝状造構は、墳丘に寄生する地下式横穴墓を周溝内に構築していることから、21号墳の周溝である可能性が高くなかった。しかし、墳丘に沿った状態でこの溝状造構は検出されておらず、東西方向に走っているため、前方後円墳もしくは、造り出し付円墳を想起させるような状態となつた。現段階では墳丘形態に不明な点が多く、今後21号墳は継続調査が必要であると考えられる。



第14図 21号墳調査区位置図(1/600)



第15図 21b出土埴輪(1/5)



図版34 21a周溝検出状況(北より)



図版35 21a周溝完掘状況(北より)



図版36 21a周溝完掘状況(墳丘より)



図版37 21b-1(東より)



図版38 21b-2(東より)



図版39 21c(北より)



図版40 21c周溝



図版41 21d(南東より)

## 報告書抄録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん						
書名	史跡 生目古墳群						
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書V						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第57集						
編集者名	稻岡 洋道・門田奈津子						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111						
発行年月日	2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
いきめこふんぐん 生目古墳群	みやざきけん 宮崎市 おおめあと 大字除江	45201	31°56'54"	131°23'15"	2002.12.13 付 近 付 近 2003.03.31	5号墳-551m <sup>2</sup> 7号墳-267m <sup>2</sup> 14号墳-96m <sup>2</sup> 15号墳-51m <sup>2</sup> 21号墳-72m <sup>2</sup>	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
生目古墳群	古墳群	古墳時代	5号墳-葺石、基壇、周溝、地下式横穴墓(19号)	5号墳-埴輪 19号地下式横穴一鉄 鐵、甕、高环			
			7号墳-一周溝(馬蹄形)、地下式横穴墓(17号、18号)	土師器一鉢、甕			
			14号-一周溝、葺石、敷石	壺形埴輪	平坦面に丁寧に配する敷石有		
			15号-一周溝				
			21号墳-一周溝、地下式横穴墓(20号)	壺形埴輪	前方後円墳の可能性有		

# **史跡 生目古墳群**

保存整備事業 発掘調査概要報告書V

2004年3月

発行 宮崎市教育委員会